



戦国百四十年型

節はたすけ一条への親心



修養科の朝礼。全員でおふでさきを拝読し、その日の心の指針とする

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

一つふしという。ふし無くば分からん。
どういう事あるうか、こういう事ある
うか。ふしから芽が出る。

明治32年1月17日 おさしづ

お道の信仰は、単に病気を治し、事情のもつれを解決するだけでなく、その根本の原因となる心遣いを改め、人をたすける心へと入れ替えることが目的です。だから親神様は、未信仰の方だけではなく、熱心に信仰している人であっても、さらに心の成人を求める上から、幾度となく身上や事情にしろしを見て、心を入れ替えるきっかけをお見せくださいます。

年祭活動の旬、一生懸命に三年千日を通る中で「なぜこんな時に?」「なぜ私ばかり?」と思うような大きな身上や事情に遭うこともあるでしょう。しかし、乱暴や迫害・干渉の連続であった教祖のひながたを思い起こせば、年祭活動で大きな節をお見せいただくのは、教祖のたすけ一条のひながたを辿らせていただいている証拠でもあります。

親は可愛い我が子を絶えずお見守りくださっているだけでなく、一人ひとりを見定めて、それぞれにちょうどいい節をお見せくださいます。大節こそ「あなたをおたすけ人にしよう」という親神様の親心の現れであり、自分を変えるチャンスなのです。この旬を逃さず、修養科への扉を開いてみてはいかがでしょうか。

正面方

修養科では、歩けない方が歩けるようになり、がんが消えたり、事情のもつれが解決したりと、しばしば不思議なたすかりを目の当たりにする。これは一体何だろうか。

おちばで日に何度もおつとめをし、空いた時間には、ひのきしんに励む。クラスの中で仲間なたすかりを願い、おさづけの取り次ぎや、添い願いが日夜行われている。そして信仰の根本である、ひのきしんを通しての心づくり、理づくりをし、真剣にたすかっていたいただきたいというおたすけが繰り返されている。

自らのたすかりを願い、修養科へ引き寄せられた者が、おちばでの伏せ込みをする中で、人のたすかりを願う心へと成人する。その中に不思議なたすけをお見せいただき、心が勇み、我が身が生きてくる。年祭活動仕上げの年に修養科生の御守護にしっかりとつとめたい。

《2月月次祭 挨拶》

この旬、勇みに勇んで 年祭活動に励もう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日々は年祭活動の上にご丹精を頂きまして誠に苦勞様です。寒さ厳しい中をこうして大教会へご参拝いただき、只今、共に2月の月次祭を滞りなく勇んで勤めさせていただき、ましたことは、大変ありがたい次第です。思うところを少しお話して月次祭のご挨拶といたします。

過日、『真明芦津の道 別冊年譜』を読んではいたるところ、ちょうど100年前の年の記事が目にとまりました。大正14年、教祖四十年祭に向かう年祭活動締めくくりの時で、全教でも芦津においても大きな動きがあった年でした。

この10年前に初代真柱様のお出直しによって、中山正善様が弱冠11歳で二代真柱を継がれましたが、年若いことから本部員が代行を務めていました。その二代真柱様が成人を迎えられ、この年の3月に初めて月次祭の祭主をなさり、4月23日の20歳の誕生日を期して「管長就職奉告祭」が執行されたのです。若き道の芯を戴いて心機一転、たすけ一条に勇躍、進展の旬を迎えたのが教祖四十年祭活動仕上げる年です。

芦津におきましては、詰所の移転建築が落成したのがこの年です。それまでの詰所は黒門が建っていた辺りにあったのですが、

手狭なために隣接地を購入して増築をしたことがあります。しかし春秋の大祭では帰参者が泊まり切れずに何軒もの家を借り上げて宿泊所に当てていました。そんな状況でしたから、教祖四十年祭の旬を得て、詰所移転ふしんに掛かり、この年の12月に落成式が執行され、翌年の四十年祭を迎えることになったのです。

その詰所は旧詰所で、覚えている方は少数派になっているとは思いますが、とにかく大きな建物で、当時周囲に何もなく、所に巨大な建物が建ち上がったのを見た町の人たちは、「陸の戦艦が現れた」と驚愕をしたという話が残っています。

教祖四十年祭は大正15年1月の15日、20日、25日の3回に分けて執行されましたが、この月の12日から27日までの詰所宿泊者は、延べ3万1千535名を数え、単純計算で毎日2千名が宿泊するよう、な大変にぎやかで勇んだ教祖年祭でした。

このように教会の歴史を振り返ることで、今の私たちがいるのは先人のおかげであることが実感できます。先人先輩方が苦勞と苦心を重ねながらも明るく勇んで、そして一生懸命に道のために真実を尽くして通られた、その伏せ込みの上に今の私たちが存在するのです。私も先人に恥じないような務めをせねばと強く感じました。

道は末代です。次の代、その次の代と、代々と後にくる道の後輩たちが「私は天理教のようばくです」と胸を張って通れるように、その手本にならせていただかねばならないと思います。末代への道を歩む私たち一人ひとりに、親神様は今の期間を託してくださっているのです。この一人ひとりに掛けてくださっている親の思いにお応えできるように、まずはこの旬、教祖百四十年祭を

目指して、勇みに勇んで年祭活動に励ませていただきたいと存じます。

◇

◇

◇

さて、来月月次祭の神殿講話は布教講話として、飾東大教会部属飾大分教会長・竹川東一郎先生に務めていただきます。布教講話は、ようぼくの大切な務めであるにいがけ、おたすけの意欲を盛り上げたいとの思いで、今年から実施することになりました。大阪に「にしんの会」という布教活動を志す人たちの集まりがあつて、毎月大勢のようぼくが布教活動を展開しておられます。

この影響を受けた人たちが地元で同じような集まりをつくるなど、こうした動きが各地に広がっています。講師の竹川先生は、この「にしんの会」の立ち上げの中心メンバーです。大阪教区は現在、三年千日毎日布教を打ち出して実施していますが、これをけん引しているのが「にしんの会」です。来月はようぼくが布教に勇める話を聞かせていただきます。教会長さん方はもちろん、殊に若い人たちに聞いてもらいたい講話です。

来月の 23 日も日曜日です。この人とは思う方にはぜひ声を掛けていただいて、ご参拝くださることをお願いいたします。今日月次祭の挨拶といたします。

今日の月次祭、大変ご苦勞様でございます。

(要約)

立教百八十八年 二月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理主命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一れつの子供をたすけたいとの思召から、教祖をやしるとして天降り給い、元初まりの真実を明かされ、たすけ一条の道をつけて、陽気ぐらしへとお導き下さいますご慈愛の程は、誠に有り難き極みでございます。私共はをやの御心に添わせて頂きたいと、届かぬながらも日々各々のつとめに真心を込めて励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、奏でる鳴物に心も陽気に座りづとめ、てをどりを勤めて、二月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参き集いました芦津の道の子達が、日頃賜る温かき親心に改めてお礼を申し上げ、一層の成人を誓つてつとめに勇む状をも嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、この句に一段とをやの思いに近づく歩みを進め、おちばに真実を運び教会に心を繋いで、大恩ある教祖に何としてもお喜び頂けるよう、心勇んで時句の御用に動き働かせて頂く決心でございます。

何卒、親神様には教祖年祭の句に尽くす私共の真心をお受け取り下さいまして、この句に相応しい成人の道へとお導き頂き、年頭にお誓い申し上げた心定め通りのおたすけと丹精の御守護を賜りますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《2月月次祭 神殿講話》

修養科生の御守護という 高い目標を持って

役員 井筒文夫

さまざまなことをお与えいただく元は、願い通りではなく、心通りとお与えくださいます。どんなときでも喜ばうと、頭では分かっている、その心になるのが難しい。ついつい不足してみたり、心曇らせてしまうときもあります。

しかし、辛いな、喜べないなどいうときに、その喜べない心をも含めた上で、「でもここを前向きに通ろう」「ここを笑顔で乗り切ろう」など、前向きな思いを持ち、思いを込め、心を定めることは可能なのです。この思いを込める心にこそ、心通りの御守護を頂戴する元があるのではないのでしょうか。年祭活動仕上げる年を迎え、「各教会が定めた年祭活動の目標達成と本年の心定めの完遂」と「おちば帰りの推進」という具体的な目

標をお示しいただいています。その中でも、目標の達成、心定めの完遂を、何としてもやりきろうとの思いで取り組んでもらいたいと聞かせていただいています。

このおちばの声に、何とかお応えさせていただくことが、大切な信仰の角目ではないでしょうか。

また大教会では、「一教会一名以上の修養科生を御守護頂こう」との目標を立てています。具体的な目標が、初席者から修養科生の御守護へと、ハードルが一気に高くなったように感じるかもしれません。今日は高い目標、大きな目標を持つことについて、お話ししたいと思います。

努力の積み重ね

アメリカで活躍する大谷翔平選

手は、すごい記録を次々と打ち立てています。記録だけではなく、その人間性も相まって、多くの人にリスペクトされ、慕われ、目標にされている素晴らしい選手です。

彼は、高校生のときに、目標達成シートを作りました。「ドラフト会議で8つの球団から1位指名を受ける」という大きな目標を立て、3マス×3マスの中心に、「ドラ1、8球団」と書きました。その周りのマスに、目標を達成するために必要な8個のキーフアクターを書き、その一つ一つを、更に9マスの中心に書き、その周りに実現するための具体的な行動目標を書いたのです。

例えば、スピード160kmを達成するためには体重増加、体幹の強化、関節の可動域を増やすなどが書かれてあり、運を手に入れるためには、あいさつや、道具を大切に使う、ゴミ拾い等々です。

彼は、高い目標を達成するために、8つの克服すべき項目と、64もの具体的な行動目標を立て、地道に努力を積み重ねたのです。

彼の超一流とも言える今の姿があるのは、もって生まれた才能や素質もあるでしょうが、それ以上に、常に高い目標と、それに向かう課題解消の努力の賜物であり、日々の努力丹精の賜物と言えます。私は、約20年ほど、天理高校ラグビー部で生徒たちの指導に当たっていました。毎年メンバーは替わりますが、力のあるチームのときでも、そうでないときでも、常に全国制覇、日本一を目標にします。

日本一という高い目標があるからこそ、自分を高めよう、強いチームを作ろうという意識も生まれ、毎日のしんどい練習や、厳しい寮生活にも、前向きに取り組むことができます。

しかし、高い目標を掲げ、毎日それに向けて努力を重ねても、毎年日本一になれるわけではありません。今年で創部100周年ですが、全国制覇という目標を達成したのには、わずか6回しかありません。では、目標を達成できなかったチームの努力は無駄だったのです。

ようか。そんなことは絶対にありません。

私が携わった20ほどのチームで、全国優勝したのは2回だけですが、優勝メンバーも、途中で負けてしまったメンバーも、あんなしんどいことをやり切ったという満足感や達成感、3年間通り切ったという自信や誇りを胸に、男前になっただけで満足してしまいます。高い目標と、それに向かっての日々の努力の積み重ねが、彼らを成長させていったのだと思います。

目標があつてこそ

これは、私たちの信仰の世界でも、同じことではないでしょうか。

高い目標をわが目標と心に定めて、日々の努力を重ねていく。そこにお互いの成人が叶うのです。

しかし、スポーツの世界と決定的に違うことは、結果の世界です。信仰の世界での結果とは、あくまでも神様から与えていただく世界です。日々の努力の積み重ねが、神様にお受け取りさえいただけたなら、成果としてお与えいただけるのです。

ですから、できる、できないが問題ではなくて、与えていただけるだけの努力を重ねていけるか、いかにわが心を澄み切らせていけるのか、成人していけるのか、これが最も重要なことではないかと思うのです。

何とか、修養科生1名を与えて頂こう、心定め、完遂を目指して、何としてでもやり切ろうと受け取っているのか、無理と思つてしまっているのか。「難しいな、無理やな」と最初から諦めていけば、成果として絶対に与えてはいただけないでしょうし、日々の努力もそれなりになつてしまい、成人す

ることもないでしょう。

大切なことは、言われたからするのではなくて、高い、大きな目標を、自分自身の目標と定めていくことです。

さあ、又えらい事言い掛ける。小さい事は言わん。小さい事は皆出来ても知れたもの。大きい事は七分出来ても大きいもの。これは一寸話の掛かりや。さあ、もう何でも彼でもどうでも何でも話し掛ける。

明治40年4月13日

高い目標、大きい目標は、7割しかできなくても大きいものなのです。また、目指すところが高くて大きいからこそいいんだ、といえることもあります。

もし目標が初席のままなら、まだ別席を運んでいない方だけしか対象となりません。しかし、目標が修養科生なら、私たちお互いも含めて、すべての方を対象とした仕上げの活動になります。

更には、なかなか修養科を勧めたくても勧められなかった方にも、大教会の打ち出しがあるからこそ、

「修養科へいきませんか」との声掛けもしやすいのではないのでしょうか。

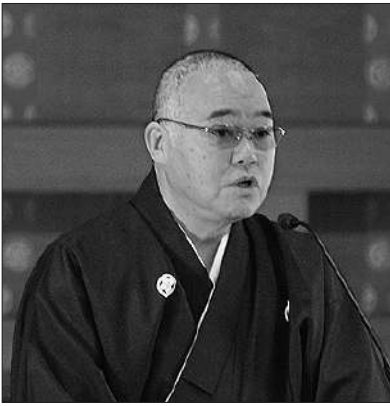
もし無理だと言われても、いずれ修養科へ入られるまでの成人を目指して丹精ができる。修養科が無理なら、「おぢばに帰ってみませんか」「基礎講座に行きませんか」「ようばく講習会へ行きませんか」「別席を聞きませんか」と、その方々に応じた声掛けが可能になる。

目標、志が高いからこそ、きめ細やかな丹精に繋がりが、更にはいろいろな方へのおたすけに繋がっていくのでありましょう。

念願の修養科生

ある教会長さんの話ですが、是非とも修養科に行ってもらいたい信者さんがおられたそうです。

しかし声を掛けると、仕事などを理由にいつも断られていた。それでも諦めずに、少しでも神様の御守護を分かちてもらえるように説き続けるとともに、お守りを頂くように働きかけた。すると、そ



の方はおちばに帰って、お守りを頂かれました。

しばらくして、その方が大きな自動車事故を起こしたという連絡が入ったのです。自動車は大破して、命を落としても仕方のない事故だったようですが、奇跡的にその方も相手の方もけが一つなく、物損事故で済んだのです。警察官からも「これは奇跡ですよ」と言われたそうです。

本来なら命を落とさねばならなかったところを、大難を小難へと変えてくださったのです。ご本人も、お守りを頂いていて本当に良かった、神様にお守りいただいたと大変感謝され、感激されました。そこでその会長さん、これだけの神様の御守護にお報いさせていたかどうか、再び修養科の話をされました。すると、その方の修養科入科の心が定まったのです。実に、8年ぶりの修養科生を与えていただいたのです。

おさしづに、
成らん処の事情、多くの中尽す運ぶ。成らん処の事情によって

日々という。どれだけ成らん処出来て来る。小さいようで大きなもの、大きなもの小さきものの理があるから大きなものや。日々勤め小さいようで大きい。何とも無く思えば何でも無い。何でも無いもの大切の理に運んでくれる。この理は計り難ない。まあこれだけ尽す一つの理、これだけの事は見て置けん。これだけの事は捨て、置けん。

明治23年6月23日

とあります。

思うように物事が運んでいかないことも、多くできてくるのが実際の姿です。そのならん事情の中を尽くす運ぶのです。小さいことにも心を込め、思いをのせて尽くし運ぶところに、大きいことに繋がっていくのでありましょう。

この会長さんは、何とかこの方に、陽気ぐらしの喜び、信仰の喜びを味わっていただきたいの思ひから、修養科を勧められたが断られた。でも諦めずに、日々、口を通して伝えて行かれた。おちばや上級にも積極的に伏せ込まれま

した。おちば伏せ込みひのきしんには、信者さんを連れて参加され、あの方にたすかってもらいたい、この方に何とか成人してもらいたいとの思いを込めて、一本一本草の根っこを抜いていかれた。伏せ込み、理づくりを重ねて、日々尽くし運ばれたのです。その結果、神様からのお手引きというお働きを頂いて、念願の修養科志願に至ったのです。

小さい物の積み重ねがあるからこそ大きなものです。日々の理をもつて、神様は必ずお働き下さるのでしょう。

小さなことに思いを込めて

私たち一人ひとりが、修養科生の御守護という高い目標を持って、「まず私は孫に伝えて初席者を与えていただく」「私はあの方におさづけの理を戴いてもらおう」「私は尽くしの上に励ませていただく」と何からでもご用を担わせていただきますように。

真柱様は、昨年の秋の大祭のご挨拶の中で、「もっとたくさんのお

ほくが年祭に心を向け、年祭へ向かつての動きに取り組むように働きかけ、丹精を続けなければ、教祖に安心してはいただけないと思います」と仰せくださいました。

私たちは、皆等しく教祖の道具衆であり、実動ようほくです。お互い一人ひとりが日々小さなことからでも思いを込めて丹精、努力していくことが、大教会としての大きな成果に繋がります、心定めの完遂にも繋がります。

初席、おさづけの理拝戴、修養科はおちば帰りの推進にも繋がります、おちばの思いに込めさせていただくことに繋がるのです。私たちが担わせていただく年祭活動のご用が、陽気ぐらしへの大きな前進であり、何よりも御存命の教祖にお喜びいただける道です。

どうか、高い目標、志を持ち、日々の小さなことに思いを込めて丹精を重ね、お互いが陽気ぐらしへの歩みを進めて、御存命の教祖にご安心いただき、お喜びいただく年祭活動仕上げの年にさせていただきますように。

二月月次祭 祭典役割

祭主	扨者	扨者	てをどり	地 方	ちやんぼん 笛
大教会長	川畑澄博	岩切正義	大教会長 奥田正徳 奥本眞二郎 樋川泰士 西本義之 新居里実 西本芳征 中村寿々代 奥田千晶 中村美津代 井筒ちぐさ 会長夫人 岩切孝子 樋川りよ子 松森明美	奥田眞治 山本義範 瀧本庄司 奥田眞治 山本義範 瀧本庄司 奥田眞治 山本義範 瀧本庄司 奥田眞治 山本義範 瀧本庄司	山田道弘 守田清一 竹内義忠 井筒敏成 加世田洋 今川政治 立花善三 松森誠太
指図方	賛者	賛者	前 半	石川健郎 濱田宣浩 葭田内浩 望月康紀 宗我道明	木村真次 梶川和隆 中村俊和 立花善文 立花裕和 吉田善三 立花善三 松森誠太
湯川正園	岡本久昭	村田光伸	後 半	望月康紀 宗我道明 望月康紀 宗我道明 望月康紀 宗我道明 望月康紀 宗我道明	今川聖一 瀧本一太郎 川畑正博 梶川和隆 宗我道明 宗我道明 宗我道明 宗我道明
献饌長 瀧本眞二郎	山内道忠 竹内義弘 山本眞二郎 瀧本眞二郎 瀧本眞二郎 瀧本眞二郎 瀧本眞二郎 瀧本眞二郎	河端芳雄 立花善三 立花善三 立花善三 立花善三 立花善三 立花善三 立花善三	花岡忠和 新居里実 新居里実 新居里実 新居里実 新居里実 新居里実 新居里実	湯川正園 湯川正園 湯川正園 湯川正園 湯川正園 湯川正園 湯川正園 湯川正園	松林英也 前田清和 榮安朗 森誠一 宗我道明 梶川和隆 望月康紀 望月康紀

関東地区芦津会

2月16日、東京教務支庁で「第33回関東地区芦津会」を開催し、東京を中心として関東在住のようばく・信者ら31名が参加した。午前10時、鳴物を入れて座りづとめ、よろづよ八首を勤めた。続いて、来年のおつとめ総会開催を目指して、それぞれ鳴物やおてふりに分かれておつとめ練習に励んだ。その後「論達第四号」を拝読し、会員同士によるおさづけの取り次ぎ合いを行った。

学生生徒修養会

大学の部、高校卒業生コース

本部主催の「学生生徒修養会・大学の部」が、3月4日から8日にかけての4泊5日の日程で、また「同・高校卒業生コース」が10日から12日にかけての2泊3日の日程で、いずれも親里で開催された。

内容は講話や講義、おつとめ勉強などで基本教理を学ぶとともに、グループワークや仲間と協力するお楽しみ行事などを通して、信仰を共にする同じ世代の仲間たちと友情を育んだ。

芦津からは大学の部に8名が、高校卒業生コースに1名が受講。

かけがえのない時間をおちばで過ごした。受講者からは、「できるだけ教祖殿に足を運んで、教祖を身近に感じられるようにしたい」「おさづけ、お願いづとめの大切さを感じた。自分もこれから人だすけを心掛けたい」「自分と異なる視点からの意見を聞くことができた」などの感想が聞かれた。



鳴物を入れ、総立ちでよろづよ八首を勤める

事情はこび

立教188年2月26日お許し

沖縄分教会

任命

七代会長

謝花良次 76歳



昭和42年中部高校卒業、50年おさづけの理拝戴、51年修養科第42期修了、62年教人登録、教会長資格検定合格、平成24年沖渡分教会長就任、令和3年辞職。就任奉告祭 4月5日

会長室報

青年勤務

【大教会】

谷上 由樹（眞 二）

立教188年1月23日

教務部報

教養掛（2月）

主任

岩切 正義

教養掛

吉田 裕樹・望月 恵美

教会長資格検定合格

山田 元喜（當 別）

立教188年2月16日教会長資格検定講習会第148回を修了し、翌17日検定合格されました。

立教188年2月10日

教人資格講習会第148回修了

中池 美和（順 世）

加藤 聡（丸 芳）

おさづけの理拝戴《1月》

福田 湧也（白野江）

水本 一輝（直 轄）

島崎 一星（直 轄）

矢野 魁星（直 轄）

飛峪 龍馬（直 轄）

東尾 颯太（直 轄）

岡田 飛雄馬（東大屋）

井上 陽（東大屋）

毛利 祐太（東大屋）

初席《1月》

《8名》直轄

《1名》芦島鶴、紀内、紀周

《順序運びより 11名》

登殿参列《2月》

岡本 久昭（靱）

武波 勉（東大木）

宗我 道明（吉野川）

山本 義彦（昭 大）

加藤 正（井内谷）

島田 道代（島 浜）

八木 香織（東大屋）

岩切 正秋（島 大）

前田 清和（大 棚）

榮 安文（奄美笠）

森 誠一朗（芦 南）

恵 善哉（大 朝）

段野 涉（大 清）

瀧本 庄司（紀 周）

瀧本 太郎（兵庫眞洲）

以上15名

学生生徒修養会・大学の部

井筒いつみ（直 轄）

八木理栄子（東大屋）

毛利 俊太（東大屋）

岩切 大道（四ツ山）

岩切 直大（四ツ山）

加世田 元（大 島）

加世田 汰（大 島）

奥田 和志（周 宝）

同・高校卒業生コース

丸山 杏琉（東大屋）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
大 教 会 (1)	8	5		
東 津 (13)			1	
吉 野 川 (29)			1	
島 原 (16)	1	3		
日 方 (15)	1			
稗 島 (7)				
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)				
門 司 (6)		1		
當 別 (6)				
大 島 (26)				
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)				
大 冠 (2)				
島 下 山 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	1			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)				
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞 明 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	11	9	2	0

月例統計（自令和7年1月1日）至令和7年1月31日）